

第2回 国際音楽学会アジア地域会に参加して

深堀彩香 愛知県立芸術大学大学院音楽研究科（音楽学領域博士後期課程）

1. 第2回 国際音楽学会アジア地域会について

2013年10月18日（金）から20日（日）までの3日間にわたり、第2回 国際音楽学会アジア地域会 East Asian Regional Association of the International Musicological Society（IMS-EA）が国立台湾大学で開催された。

2011年に発足した本会は、東アジア諸国からオーストラリアにまで及ぶ太平洋沿岸の国々（中国本土、韓国、日本、台湾 etc.）が所属しており、隔年で国際大会を開催している。第2回目となる今大会は、"Musics in the Shifting Global Order グローバルな秩序が移り変わっていく中での諸音楽" という統一テーマが掲げられた。

今回、大会が行われた国立台湾大学は、キャンパスも大学としての規模も非常に大きく、大会スタッフのほとんどが、この大学に通う音楽学の学生だったようである。大会期間中に行われた全28セッションのうち、口頭発表は約60件、パネル発表は約20件あり、その他ラウンドテーブル等を含め、約100名の研究者によって議論がなされた。

大会の規模は、想像していたよりも小さくなく、全体的に明るくアットホームな雰囲気だった。発表の合間には、一般的な休憩の他に、午後に30分間のティー・ブレイクの時間が設けられていた。この時間は、お茶や軽食を楽しみながら、参加者同士が気軽にやり取りできるため、様々な意見や情報の交換が活発になされていたのも印象的であった。

2. 大会参加に至るまで

今大会へのエントリーに声が掛かったのは、2013年2月半ばであった。エントリー締切が2月28日だったため、大急ぎで募集要項に目を通し、規定の英語300語以内で発表要旨をまとめた。締切当日に大会ウェブサイト内においてエントリーを無事に完了し、審査の結果を待った。その後、5月中旬に大

会運営側から吉報を受け、大会で発表できる運びとなった。

実際に発表の準備に取り掛かったのは、大会まで1ヶ月を切った9月末になってからである。発表は、英語で20分、その後質疑応答の時間が10分設けられている。慣れない英語での初めての発表であることに加え、短い時間で要点をおさえた内容、より効果的な構成でなければならぬため、原稿作成に苦戦した。発表内容は、修士論文で扱った題材を基に、「16世紀から18世紀にかけてイエズス会が行った宣教活動の中での音楽活動について、日本とマカオを中心に行った研究の成果を示す」というものである。10月2週目の音楽学総合ゼミの時間をいただいて予行演習をし、その後、先生方からのアドバイスと英語の添削によって、出発前に原稿を完成させることができた。

3. 大会で得たもの

大会最終日である10月20日(日)のセッション6Gで口頭発表を行った。このセッションのテーマは、"Encounters in Ecclesiastic and Economic Contexts"で、司会は東京工業大学のヒュー・デ・フェランティ教授であった。

発表後に行われた質疑応答の際には、10分という規定の時間を超えるほど多くの質問を頂戴した。その中で、本研究を進めるにあたって大きな問題となる、一次史料の不足に話が及んだ。当時イエズス会士たちが記した報告書や書簡といった一次史料は、本研究にとって非常に重要なものであるが、これらは日本のキリスト教弾圧やマカオの古文書館の火災等の理由により、ほとんど現存していない。このような研究上の問題に対するひとつの対応策として、「西洋と極東間の航路内において経由地として機能していた地域にも、積荷のリスト等の記録が残っている可能性があるため、目を通す必要があるのではないか」という助言をいただいた。これは、今後の研究にも活かせる大きな収穫となった。大会終了後には、香港バプテスト大学音楽学部のホームページにおいて、本大会の報告として右下の写真を掲載し、紹介していただいた。また、帰国後も、研究者の方々から参考となる資料や文献の情報を提供していただくなど、今後に繋がる大変実り多き大会参加となった。

次回の大会は 2015 年に香港で、次々回は 2017 年に東京で開催される。多くの人に本大会への参加および発表を勧めたい。



会場となった台湾大学



発表後、香港バプテスト大学、
サウサンプトン大学の先生方と